



川邊尚子さん
釜師

日本に2人だけの女性釜師

奇をてらわず、しかし時代と共に

茶道に不可欠な茶の湯釜をつくる釜師は、全国に数十名という特殊な職業。父の背中を見てこの道を選んだ、若き同志社OGがいます。

楽しそうに釜をつくる
父の姿に魅せられて

釜師というお仕事に加え、女性とは珍しいですね。

川邊 女性の釜師は、日本では東北の鈴木盛久工房の15代目と私の2人だけだと思います。でも私には、女性だからという特別な思いはありません。中学・高校と同志社女子で、のんびりと過ごせたからでしょうか。ただ、鑄型が重いので、腕力のない点だけは不便ですけれど。

お父様から跡を継いでほしいと言われて、この道に入られたのですか。

川邊 昔も今も、特に継げとは言われていません(笑)。ただ、釜はとも身近な存在でしたし、父が楽しそうに仕事をしているのを見て、私もやりたいなど。

釜師を志した大きなきっかけは。

川邊 中学時代、学校帰りに裏千家流のお稽古に通ったことです。茶釜の役割を実際に学び、さらに興味が湧きました。大学でも2年次生から茶道部に入り、その頃いずれば釜師になる決心をした記憶があります。夫とも茶道部で知り合っただけに、私の仕事を理解してくれ、自由にやらせてくれるのはありがたいですね。

茶道部に入ったことも人生の転機でした。余談ですが、来年のNHK大河ドラマの主人公、新島八重さんもお茶を教えておられましたね。八重さんゆかりのお道具がいくつか茶道部にありました。

釜のつくり方を簡単に教えてくださいますか。

川邊 砂や土と粘土汁を合わせて外型と中型を作ります。土が乾ききらないうちに文様などを付けた後、炭で焼く。2つの型を合わせ、できた隙間に約1300度の鉄を流し込み、鉄が冷えたら型を割って外し、色を塗るなどして仕上げます。

一人前になるには何年かかりますか。

川邊 私が一人前かどうかは分かりませんが、3年でひと通りを覚ええました。最初に教わったのは砂のふるい方や粘土汁との合わせ方。砂の粒が揃わないと後で型が割れたりするので重要な作業なのですが、見て、感覚で覚えるしかありませんでした。

そして3年前に初出席。

川邊 父のようになかなか思い通りにはつくれず、自分ではまだ早いと思ったのですが……。父から「お客様は意外な点をほめてくださるから絶対に出世」と言われて出しました。お客様の生の声を聞け

たのが一番勉強になったと思います。

制約と創造とのバランスが魅力

釜のデザインはどんなところから生まれるのですか。

川邊 お能の趣向で茶会をされる方が多いため、私も宝生流のお能を習っています。そこで有名な演目から着想を得ることもありますね。新宿で父娘展を開いた時、まさにお能をしておられる方が買ってくださいったのが、私の「羽衣釜」でした。「羽衣」というおめでたい演目からモチーフを取ったものです。オーダーものの場合、お客様がお寺の方なら寺ゆかりのモチーフを伺い、それを元に鑲付を選ぶことも。祖父の買った古い文様集を見たり、図書館で文献を調べたりすることもあります。

釜づくりの面白さを聞かせてください。川邊さんの風炉釜「星空釜」には無数の星の文様が浮き上がり、摘みにはとんぼ玉が使っています。斬新ですね。

川邊 釜づくりは、茶道という枠組みの中で自由に創造するところが、難しいけれども面白いですね。冬用の釜なら、四角い炉に収まるサイズと形。素材は鉄だ

から、色は茶色や黒っぽい色で、無限に選択肢があるわけではない。その制約の中で自分の個性を表現し、なおかつ使い易くて喜んでいただけるものをつくるところに、やり甲斐を感じます。一方で、毎回思い通りに仕上がるとは限りません。その時の土の配合や天候に左右されることもありますが、明らかな失敗作は別として、わずかな文様の欠けなら、それもまた「景色」。茶味として味わえるところが奥深いです。

でも、たまにはもっと自分を表現しなくありませんか。

川邊 そんなときはたいてい、父に鼻先で笑われて終わります(笑)。私たちはあくまでも、お客様のご要望を形にする職人。使ってくださいの方が主役なので、こちらの自己主張が強すぎたり、奇をてらったりした釜は絶対だめだと思います。

茶道はいま世界に広がっています。

川邊さんは、海外へ発信する計画などは。川邊 関心はあります。私は奈良から京都に出てお茶を知り、東京に住んで奈良の良さを再認識しました。海外という舞台に立てば、また新たなことが学べると思います。釜に対して、日本では思いもつかないニーズがあるかもしれません。

ただ、今はうちの工房のお客様やお世話になってるギャラリーさんを大事にしたいので、ネットを通じて海外の不特定多数の方に発信するなどの予定はありません。

今後はどんな茶釜を？

川邊 ひと目見て、いいなと思ってもらえる釜です。でもシンプルなこと程難しいから、経験も必要だと思います。

私のつくった釜を使いたいと思って、お茶を始める人が増えることも夢です。私などが偉そうなことは言えませんが、お茶は衣食住すべてを包括しているところが素晴らしい、一生かけて究める道。一方で、難しいお茶もできるし、薄茶一服で和気あいあいとした、明らかなお茶もできます。さまざまなシーンに合わせて、いろんな釜をつくっていききたいです。そのためにも若い方たちに茶道の良さをもっと知ってほしいし、同志社の学生さんにも、どんどん茶道部に入ってほしいです。

いずれば4代目を継がれますか。

川邊 父の許しが出れば。今後も精進し、父娘展も開いていきますので、卒業生の皆様にもお越しいただければ幸いです。

(2012年1月27日、奈良県橿原市の3代川邊庄造工房にて)



名和 博さん
サイクリスト／銀行員

夢は3000峠制覇！

走り続ける、 自称“峠おやじ”

嫌いなものは「平地と海」と言い切る、筋金入りのマウンテン・サイクリスト。約12年間に到達した峠は2200以上。もはや趣味の域を超えた峠攻略のダンディズムに迫ります。

上り坂こそが峠越えの醍醐味

——サイクリングの魅力を教えてください。

名和 まず、コースが自由に組める。自動車の人れないような旧街道も行けるし、山道なら自転車を担いで行けばいい。自分の力だけで走り切った時の達成感は何ものにも代えられません。風を切る感覚も好きです。高校時代は岐阜から京都まで往復270キロを一日で走ったり、よく輪行をしたりしました。図書館から「街道細見」という本を借りてノートに「写本」、国土地理院の5万分の1の地図と見比べてコースを作ったものです。

——学生時代も自転車中心の生活でしたか。

名和 同志社サイクリングクラブに入っただけで、泊まりがけのツーリングによく行きました。そもそも、なぜ同志社大学に来たのか。輪行向きの自転車を作っていたアルプスというメーカーの提携店が、東京と京都にしかなかった。そして京都といえば、同志社。だから受けた私学は、早稲田と同志社くらいでした(笑)。

——就職、結婚して、自転車はしばらく中断。再開の経緯をお聞かせください。

名和 45歳くらいの頃、インターネット

の黎明期にニフティの自転車フォーラムを知り、オフ会ミーティングに参加しました。その会がロードよりもマウンテン主流だったため、山に走りに行くようになった。それから徐々に走る機会を増やしていきました。本部勤務になって残業がほとんど無くなり、休暇の予定が立て易くなったことも幸いました。

——そこから峠攻略をスタートされた。

名和 山の多い日本を旅すると、必ず峠を越えねばなりません。そのうち逆に峠越えを目的に走るようになりました。実際に峠攻略を始めたのは、オートバイライダーの賀曾利隆さんが書かれた「バイクで越えた1000峠」に刺激を受けてからです。バイクなら1000峠は難しくないだろう、じゃあ私は自転車で、より困難なことにチャレンジしよう。

——峠越えの魅力は何ですか。

名和 非日常の高揚感ですね。峠を越えると、必ず新しい世界がそこにある。25歳くらいの頃、信州の嶺方峠へ輪行した時は非常に感動しました。谷底の風景を見ながら走り続けてトンネルを抜けると、雪を被った白馬がパッと眼前に広がった。小説のような体験でした。峠で分けられ

た二つの地域には、それぞれ異なる風土や文化があったりします。その異なるものへの備えとして道祖神やお地蔵さんがあるし、歴史上の有名人が通った峠もたくさんある。昔日の情景に思いを馳せるロマンもまた、峠の魅力の一つです。

——奥深いんですね。峠越えと聞くと、つい上りの苦しさを想像してしまいます。**名和** 峠越えは下りよりも上りが、断然好きです。下りはうっかりすると時速50キロ以上出ます。神経が路面に集中するから、山に来ているのに周囲の景色を見る余裕がない。上りはたいいてい時速5、6キロ。徒歩とそれほど変わらない速度なので、入ってくる情報量も多い。苦しみのあまり、ペダルを踏みつつ美しい景色に助けを求めるから、却ってリフレッシュできます。上りを楽しまない、山に来た値打ちが無いというものです。

——それにペースに慣れると、苦しさを忘れる時間帯があるんですね。β-エンドルフィンという快楽物質が出て、いわゆるランナーズハイになる。上りを楽しむことで癒やされ、活力をもらえるのです。

——お一人で走るとお仲間と走るのは、どんな違いがありますか。
名和 一人で走る時はふと自問自答する

ようなことがあって、大袈裟かもしれませんが自分が自分を見つめ直す機会になります。町の灯りを見つけてほっとした時は、安堵感の中で「ここまで来たんだ」という誇らしさに静かに浸れる。一方、他人の作ったコースを走るのはオリジナリティーに欠けます。上りで速さを競い合うなど、つい余計な競争心も出てくる。もちろん仲間から教えられることも多いのですが、内輪だけで盛り上がりつつ完結してしまうこともある。結果として、どんなコースを走ったのかあまり記憶に残りません。自分の責任とペースで走り、景色や雰囲気すべて自分の感覚で楽しむ方が、私は圧倒的に好きですね。

人生を楽しむ極意は 不断の備えと中庸にあり

——峠越えに必要な要素は何ですか。
名和 体力、知力、判断力。判断力には撤退も含まれます。知力とはできるだけ事前に情報収集しておくことです。体力維持のために今も週末は1時間程度の走行を欠かしませんし、エクササイズプログラムのDVDを見ながら、太った体をしばったこともありました(笑)。

——中期以降の人生の楽しみ方について、読者にアドバイスをお願いします。
名和 私のような年齢で趣味にある程度打ち込むには、エネルギーが求められます。例えば定年退職後、趣味に生きようと思うのであれば、リタイア前から少しずつ準備をされるといいでしょう。それと月並みですが、何をするにも日頃の体調管理が大切。私は本部勤務になってから往復約4キロを徒歩通勤していたので、本格的な自転車再開までに少しずつ心肺機能が戻ったのだと思います。

——いつまで自転車に乗りますか。

名和 体の動く限り。ただ、熱中できるものがある程度、ほどほどにしておく勇氣も必要だと思いますよ。趣味があるレベルまで高じると、さらに上へ行くためには相当のお金とエネルギーが必要です。自転車ならパーツに凝り出すと1台で50万から100万円かかることもあって、きりがありません。今の夢は3000峠制覇ですが、2500で終わるかもしれない。適度なところで満足することもまた、人生の知恵なのかもしれませんね。

（聞き手 當村まり、2012年2月23日、岐阜市の自宅にて）